

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「陽成院歌合（惜秋意）」二番歌の解釈
Author(s)	顧, 宇豪
Citation	国文学攷, 255 : 31 - 42
Issue Date	2023-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054788
Right	本誌に掲載された論文等の著作権は、著者に帰属します。
Relation	



「陽成院歌合（惜秋意）」二番歌の解釈

顧 宇 豪

はじめに

「陽成院歌合（惜秋意）」（以下本歌合という）は、現存する四つの陽成院関係歌合（本歌合・「陽成院歌合（夏虫恋）」・「陽成院親王二人歌合」・「陽成院一宮姫君歌合」）の中の一つである。本歌合は、成立時期が延喜十三年（九一三）九月九日と伝わり、『平安朝歌合大成』（以下略称『大成』）第一巻（二四）^頁に収録されて、陽成院が主催した私的で小規模な歌合だという推測がなされている。残念ながら、本歌合はいまだ注釈書の類には収められないため、本歌合についての研究は乏しいのが現状である。本歌合の全貌を把握するために、まずは各歌の解釈から着手したい。

本稿は、「陽成院歌合（惜秋意）」の初番（^頁末尾に歌番号を付す）、

左勝

としことにとまらぬ秋としりなからおしむ心のこりすもあるかな（一）

右

おしといひてうみへもさそへとひわたるいつれか秋のわたりなるらむ（二）

にある二番歌の解釈に焦点を絞るものである。歌題「惜秋意」を体現する単純明快な一番歌に対し、二番歌は非常に難解と言わざるを得ない。本稿では、当該歌の特色をなす複数の掛詞の具体的な意味と他の表現との関連性を検討した上で、二番歌全体の解釈を提示したい。

一、「とひわたる」について

まず、二番歌の本文について、『大成』と『新編国歌大観』（以下

略称『大観』ではそれぞれに、

惜しといひてうみへもさそへとびわたる何れか秋の渡りなるら

む(萩谷朴)

をしといひてうみへもさそへとひわたるいづれかあきのわたり

なるらん(藤岡忠美)

と提示しており、その相違点は、傍線を付したように「とひわたる」

についての見解となる。確かに、諸伝本を見てみると、「とひわた

る」と「飛わたる」という二つの本文のパターンが存在している

ので、『大成』と『大観』の校訂本文の合理性について吟味する必

要がある。

『大成』の示した本文によれば、三句の「とひわたる」は、「飛び

渡る」に当たる。「飛び渡る」は、一般的に鳥に使用する表現であり、

その用例は、

●万葉集・卷十五・三六四八・三六二六

多都我奈伎 安之倍乎左之互 等妣和多類 安奈多頭多頭志

比等里佐奴礼婆

たづがなき あしへをさして とびわたる あなたづたづし

ひとりさぬれば

●万葉集・卷十六・三八五三・三八三二

詠「白鷺啄」木飛「歌

池神 力士儼可母 白鷺乃 杵啄持而 飛渡良武

いけがみの りきしまひかも しらさぎの ほくひもちて
とびわたるらむ

●村上天皇御集・七二

(あらじわが身を)

さとわかずとびわたるなるかりがねを雲井にきくはわが身なり

けり

●拾遺和歌集・卷十・神楽歌・五八六

しながどりゐなのふし原とびわたるしぎがはねおとおもしろき

かな

とあるように、「たづ(鶴)」、「しらさぎ(白鷺)」、「かりがね(雁金)」、

「しぎ(鴨)」がそれぞれに「飛び渡る」の主体として詠まれている。

そのため、「飛び渡る」という『大成』の校訂に従えば、二番歌に

は鳥が詠まれていると想定できる。二番歌において明白に言及した

鳥は存在しないが、実は、初句の「おしといひて」にある「おし」は、

「をし」、即ち「駕」が掛けられていると考えられる。「駕」と「惜し」

を結び付けた例の初見は、

●万葉集・卷二十・四五二九・四五〇五

伊蘇能宇良尔 都祢欲比伎須牟 乎之杵里能 乎之伎安我未波

伎美我末仁麻尔

いそのうらに つねよひきすむ をしどりの をしきあがみは

きみがまにまに

にある「をしどりのをしきあがみは」で、語呂合わせのように、「をしどり」は「をしき」の序詞的な存在となっている。次に、『古今和歌集』には、

●古今和歌集・卷十三・恋三・六七二

池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれどあらはれに
けり

という歌があり、この歌における「名ををし鳥の」という表現は、「名ををし」と「をし鳥」を掛けており、『和歌文学大系』（以下略称『和歌』）では「噂になるのを惜しむ鴛鴦」と解釈されている。さらに、「いふ」という表現を加え、初句と最も近似する用例は、

●順集・二九四

（池にもみぢをうかぶ、水鳥あり、馬にのれる人ゆく、その霧のなかに雁なきて渡る、野にかりする人あり）

池のうへにうかぶもみぢのからにしきをしといふ鳥ぞたたため
たらし

にある「をしといふ鳥」という表現である。それについて、『和歌』では下の句を「それを惜しいと思って鴛鴦は裁ち切ることなく、飛び立たずにいるらしい」と解釈している。この歌を参考にすれば、当該歌の初句を「惜しいと思っている鴛鴦」と解釈できる。

一方、『大観』の校訂に従えば、三句は「問ひわたる」に当たる。「問ひわたる」の用例は次のようになる。

●大齋院御集・五二

（詞書省略）

とひわたることのいらへをせぬひとはいききひととも見えもし
つらむ

●相模集・五六四

（雑）

とひわたる人もやあると人しれずまつにおとせぬ宮ごどりかな
『大齋院御集』・五二について、『大齋院御集全注釈』は「くりかえし問いかけつづけたこと（についてそ）の答をしらない人は、（板のような、無口で）たいそうひどい人だとも見えたりもしたことでしよう。」と解釈しており、『相模集』・五六四について、『相模集全注釈』は「わたしの安否をずっと気にかけて、尋ねてくれる人がいるかとひそかに待つけれど、一向にたよりをくれない都鳥ですこと。」と解釈している。以上のように、「問ひわたる」は和歌において、「ずっと問いつづける」といった意味で詠まれている。従って、三句を「問ひわたる」と想定する場合、何かをずっと問い続けているのであり、その具体的な問いの内容は、下の句の「いづれか秋の渡りなるらむ」、即ち「秋の渡り」がどこなのか、という疑問となる。従って、当該歌の三句を「とひわたる」「飛びわたる」のいずれかに決するためには、まず下の句の「秋の渡り」の具体的な意味を詳しく検討する必要がある。

二、「秋の渡り」の意味

では、「秋の渡り」の意味について検討していく。

実は、「秋」が「渡り」と直接に結び付く例は驚くほど少ない。

本歌合は恐らくその初例で、本歌合の二二番歌、

竜田川渡りし秋にあらぬかな流れて紅葉常に見るべく

にある「渡りし秋」はその近似表現の一つだと考えられる。用例としては、

● 忠見集・二八

み屏風に、よしの山

みよしののやまのわたりをわけくればはるのわたりになりけるかな

● 経信母集・一三三

あきのくれに、すすきのまねくを

わがやどのまへわたりするあきならばかきねのすすきまねきとどめよ

が挙げられ、いずれも季節が通り過ぎることを意味している。一般的に、

● 古今和歌集・卷三・夏歌・一六八

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋と行きかふそらのかよひちはかたへすずしき風やふく

らむ

とあるように、季節は天空を経由して通過するものと認識されており、本歌合にも、

目に見えて別るる秋を惜しめども大空のみぞながめらるらむ

(一一一)

大空の心ぞ惑ふ目に見えて別るる秋を惜しむ我が身は(三七)

と、空を経由する秋のことが詠まれている。しかし、そのような空を経由するというニュアンスは、二番歌には特に見当たらないのである。

その上、「渡り」は多数の意味を持っているため、その意味をも特定する必要がある。「渡り」の用例を整理してみると、次のようになる。

● 躬恒集・二七一

七日

ひさかたのあまの川ぎりたつときはたなばたつめのわたりなるらむ

● 嘉言集・二三三

かたのをすぐるほどに川霧たちわたる

川霧にそこともみえずおぼつかなこれやかたののわたりなるらん

● 赤染衛門集・二

つとめて帰るに、空いみじうきりわたるに、ひぐらしのなきしに

いとどしく霧ふる空にひぐらしの鳴くやをぐらのわたりなるらん

● 故侍中左金吾家集・四九

あきぎり

かはぎりはをちみえぬまでたちにはけりいづれかよどのわたりなるらん

● 播磨守兼房朝臣歌合・八

朝霧にみちはまどひぬたつたがはいづれのほどかわたりなるらん

● 栄華物語・五七八

若葉さす蘆の汀に浪寄るはこや三島江の渡りなるらん

● 同上・六〇四

あとばかり見えしなりけりこれやさは長柄の橋の渡りなるらん
用例を見ると、「渡り」は、『躬恒集』の歌が織姫の天の川を渡る時を指す以外、ほとんどの場合、川の渡し場を指している。そのため、「秋の渡り」は秋の渡し場を指す可能性がある。特に、二番歌の二句では海に言及しており、海との関連を考えれば、渡し場という意味は無視できないであろう。

また、『古今和歌集』には、

● 古今和歌集・巻五・秋歌下・三一

秋のはつる心をたつた河に思ひやりてよめる づらゆき

年ごとにもみぢばながす竜田河みなどや秋のとまりなるらむ
という歌があり、その末尾「秋のとまりなるらむ」は構造的に二番歌の末句「秋の渡りなるらむ」と類似している。なお、本歌合の二二番歌、

竜田川渡りし秋にあらぬかな流れて紅葉常に見るべく(二二)
の紅葉が竜田川に停滞するという発想も、この歌の描いた情景と近似している。『古今和歌集』のこの歌は、『大成』によると寛平八年(八九六)六月以前に成立した后宮胤子歌合(『大観』では「寛平御時中宮歌合」と称す)にも見られるため、本歌合に撰取される可能性が十分ある。

そして、この歌は『新日本古典文学大系』^(注10)では、「来る年ごとにもみぢ葉を流す竜田川は、その河口が秋の泊まり場所なのだろうか。」と解釈されている。つまり、「みなと」は船の停泊所という意味を持っており、当該歌では流れて集まった紅葉が船のように竜田川の河口に滞留するという現実的な風景を、秋そのものが河口に滞っていることに喩えるのである。このような詠み方は、同時代ではまれであり、『古今和歌六帖』にある、

●古今和歌六帖・二〇四

或本みつね

紅葉ばの流れてよどむみなとをぞくれゆく秋のとまりとは見る
ぐらしか見当たらないのである。ただ、天徳四年内裏歌合には、

●天徳四年内裏歌合・二〇・二一

十番 暮春 左勝

朝忠

はなだにもちらでわかるる春ならばいとかく今日はをしま
ましやはざらましとも(二〇)

右

博古

ゆくはるのとまりをしふるものならばわれもふなでておくれざ
らまし(二一)

左歌、首尾相叶、ふるまひもありてをかし

右歌、ことばだみたるやうなり、うたがらおとれり、仍以

左為勝

と、惜春の歌として詠まれる二二番歌には「はるのとまり」という
表現が見られ、三句の「ふなで(船出)」を踏まえれば、『古今和歌集』
三二一と同じく、季節が停滞することと船の停泊所を掛けていると
考えられる。実は、『貫之集』にも、

●貫之集・二八六

今までにのこれる岸の藤波は春のみなとのとまりなりけり

と、春の「とまり」が詠まれた歌が見受けられる。天徳四年内裏歌

合・二二は、「過ぎ行く春の停泊所が告げ知らせるものなら、私も

出航して遅れないのに」と解釈でき、春の停泊所があれば、船を出
して引き留めに行くという反実仮想の手法を用いて、惜春の気持ち
を表現しているものと解せる。この歌では、「はるのとまり」とい
う春の旅立の停泊所が想定されているので、それを踏まえれば、本
歌合の二番歌の「秋の渡り」は「これから過ぎ去る秋の渡し場」を
指しているのではないか。「とまり」は季節の停滞することと季節の
停泊所を掛けているので、「渡り」は季節の移り変わることに季節
の渡し場を掛けていると考えられる。そして、過ぎ行くこうとする季
節を引き留めようとして、天徳四年内裏歌合・二二では船で出航し
て後を追い、本歌合の二番歌では「海へも誘へ」と海へ赴くという
動作に繋がる。即ち、二番歌では、秋の渡し場を海港に想定してい
るであろう。

因みに、天徳四年内裏歌合・二二の判詞を見ると、この歌は、訛
りがあるようで、風格も劣るとされておられ、やはりその内容はや
理解しにくい所があるであろう。これは本歌合の二番歌にも当て嵌
まるかもしれない。

三、「海へも誘へ」の主体

さて、二句「海へも誘へ」に戻り、その意味について検討してい
く。この命令句における誘う対象が詠み手であることは言うまでも

ないが、誘うという動作の主体について考える必要がある。

「誘ふ」の用例を整理してみると、以下のようになる。

●寛平御時后宮歌合・八九

秋風にさそはれ来つる雁がねの雲ぬはるかにけふぞ聞ゆる

●千里集・二

鶯声誘引来花下

うぐひすのなきつるこゑにさそはれて花のもとにぞ我は来にける

●古今和歌集・卷十八・雑歌下・九三八

文屋のやすひでみかほのぞうになりて、あがた見にはえいでたたじやといひやりける返事によめる

小野小町

わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

●後撰和歌集・卷一・春上・九一

(題しらず)

吹く風のさそふ物とはしりながらちりぬる花のしひてこひしき

●同上・卷七・秋下・三六〇

(題しらず)

秋風にさそはれ渡るかりがねは物思ふ人のやどをよかなん

●落窪物語・四三

女(落窪の君)

さそふなる風に散りなば梅の花われや憂きみになりはてぬべき

以上のように、「誘ふ」は、風と組み合わせ、寛平御時后宮歌合・

八九と『後撰和歌集』・三六〇では雁が秋風に誘われて飛来すること、『後撰和歌集』・九一と『落窪物語』では花が風に散らされることとが詠まれている。また、和歌ではないが、『宇津保物語』・國讓

下では「花誘ふ風ゆるに吹ける夕暮に、花雪のごとく降れるに」とあり、花を散らす風を「花誘ふ風」と表現している。しかし、こ

うした表現は、「風」の含まれない二番歌には当て嵌まらないのである。

一方、『千里集』・二における、鶯の鳴き声に誘われて花の下に

来たという表現は重要なヒントとなる。何故なら、前記のように、

初句「おしといひて」の「おし」は、鴛鴦を指す「をし」と掛けて

いる可能性があり、「おしといひて」で鴛鴦が「惜し」という鳴き

声を出していることを表現したものと考えられる。鴛鴦の鳴き声に

関しては、

右大臣

かくれぬにすむをしどりのこゑたえずなげどかひなき物にぞ有

りける

●同上・巻二十・慶賀哀傷・一四〇〇

あひしりて侍りける女の身まかりけるをこひ侍りけるあ
ひだに、よふけてをしのなき侍りければ

閑院左大臣

ゆふさればねにゆくをしのひとりしてつまごひすなるこゑのか
なしさ

のような例が見える。『後撰和歌集』・七七五では、鴛鴦が片方の雄を指し、妻乞ひの鳴き声を発している、『後撰和歌集』・一四〇〇では、独り寝の雄の鴛鴦が妻を恋慕って声を発しており、また、いずれも鴛鴦の鳴き声について詠んでいる。前者の詠者は藤原師輔だが、後者の詠者は藤原冬嗣で、その生没年は宝亀六年（七七五）（天長三年（八二六））となるため、和歌における鴛鴦の鳴き声に対する注目は本歌合以前に既に存在したと考える。とすれば、鴛鴦と海、そして鴛鴦と秋の関係についても整理する必要がある。

まず、鴛鴦の生息について、『日本の野鳥⁶⁵⁰』「オシドリ」条の「分布・生息環境」に、

留鳥または冬鳥。主に本州中部以北で繁殖し、冬は西日本で越冬するものが多い。東北地方以北ではほぼ夏鳥。森林の水辺で樹洞を使って繁殖し、山間の溪流を好み、湖沼、池、河川に生息する。

とあるのによれば、近畿地方においては、鴛鴦は秋に飛来するので、

渡り鳥と認識されていたであろう。そのため、『拾遺和歌集』には、

●拾遺和歌集・巻四・冬・二二六

（よみ人しらず）

夜をさむみねざめてきけばをしどりの浦山しくもみなるなる
かな

●同上・巻四・冬・二二八

（よみ人しらず）

夜をさむみねざめてきけばをしぞなく払ひもあへず霜やおく
らん

●同上・巻四・冬・二二二

紀友則

とびかよふをしのはかぜのさむければ池の水ぞさえまさりけると、鴛鴦が冬鳥として詠まれている。ただ、前記の『順集』・二九四「池のうへにうかぶもみちのからにしきをしといふ鳥ぞただであたらし」のように、鴛鴦が秋に詠まれる用例も確認できるため、惜秋の歌に鴛鴦を詠むことも間違いではないようである。

続いて、鴛鴦の生息地については、和歌の例を見ると、『万葉集』には、

●万葉集・巻二十・四五三五・四五一一

属二目山齋作歌三首

乎之能須牟 伎美我許乃之麻 家布美礼婆 安之婢乃波奈毛

左伎尔家流可母

をしのすむ きみがこのしま けふみれば あしびのはなも

さきにけるかも

という歌があり、『和歌』^(尾)によれば、この歌は前記の『万葉集』・

四五二九・四五〇五と共に式部大輔中臣清麻呂邸での宴会の歌であり、「きみ」が主人の清麻呂を指すため、「をしのすむきみがこのしま」は清麻呂邸の庭池に鴛鴦が住んでいることを示している。上記の『古今和歌集』・六七二、『順集』・二九四、『拾遺和歌集』・二三三も同様に鴛鴦が池に住むことを示しているので、和歌において、鴛鴦は庭の池に住む印象が定着していたと言える。

しかし、鴛鴦が海と共に詠まれる例も存在しており、その例は次のようになる。

●千載和歌集・巻八・羈旅歌・五〇二・五〇三

海のつらにふねながらあかして、よみ侍りける 和泉式部

水のうへにうきねをしてぞおもひしるかかればをしも鳴くにぞ
有りける

●広田社歌合承安二年・七〇

宰相中将実守

なこのうみにたつともみえぬをしがもやとほざかりゆくあまの
ともぶね

『千載和歌集』五〇二・五〇三では和泉式部が船の上で一晩を過こ

す体験から鴛鴦の浮き寝を連想しており、広田社歌合承安二年・

七〇では相伴う海人の舟を鴛鴦に喩えている。この二首の歌はいずれも鴛鴦を比喻として詠んでおり、実際に海に生息する鴛鴦を詠んでいるわけではないので、鴛鴦を海と強く結び付けるのは難しい。ただし、都人にとって身近な海は、一般的には現在の大阪湾が該当すると考えられる。当時は難波潟と呼ばれる湿地帯が広がっていたと想定すると、鴛鴦がそこに生息していた可能性も否めないだろう。前記のように、下の句の「秋の渡り」は、海の沿岸部にある港だと推測しているので、場所としては、大阪湾の沿岸部と一致しているとも考えられる。従って、鴛鴦を海と結び付けて詠むのは、和歌的にはあまり馴染みのない表現だが、現実的には合理性があると考える。

四、二句と三句の関係

前記のように、二句「海へも誘へ」は、鴛鴦の鳴き声が詠み手海の沿岸部に誘うことを指している。そして、二番歌の下の句では詠み手が沿岸部で秋の過ぎ去る港を尋ねるといふ流れになると考えると、一つ疑問点として挙げられるのは、詠み手が沿岸部に行く過程である。この問題から二句と三句の関係を考えたい。

まず、二句「海へも誘へ」にある「も」の意味について考えておきたい。「へも」の用例を整理してみると、以下のようになる。

●古今和歌集・卷十四・恋歌四・六九三

(よみ人しらず)

君こずはねやへもいらじこ紫わがもとゆひにしもはおくとも

●躬恒集〔第七卷〕・二九八

おなじ御時、しづめるよしを思ひて、あるくら人につかはしける

いづくへもはるのひかりはわかなくにまだみよし野の山は雪ふる

●貫之集〔第三卷〕・一一四

旅を帰る雁どもあり

ともどもとおもひきつれど雁金はおなじ里へもかへらざりけり

●同上〔第三卷〕・三六四

みち行く人、馬にのりてぶちして月をさしてみる

照る月を見ざらましかば鳥羽玉のよるは物へもゆかずであらまし

●同上〔第七卷〕・三八

はなのきのもとかへりなんとてよめる

われはきて家へとゆくをちるはなはさきし枝へもかへらざりけり

以上の「へも」の用例を確認すると、いずれも下に打消し語を伴うので、「も」は文法的には強意であると考えられる。更に、当該

歌二句は命令句となっているため、その点から見てもこの場合の「も」は用法的に強意だと考えられる。そして、ここで強調したいものは、「へも」が下接した「海」という場所となる。このように二句において海岸を強調するのは、やはり空間的には容易にアクセスできない場所だからだと考えられる。命令句である二句はそもそも誇張的な表現だとも言えよう。

前述したように、アクセスしにくい海岸に詠み手がどのように赴くのが問題である。天徳四年内裏歌合・二一の下句「われもふなでておくれざらまし」では、いつでも旅立とうとする春の停泊所に赴くために、早く出航したいと言っている。これを参考にすると、二番歌の場合、すぐにも過ぎ去ろうとする秋を惜しんで、一刻も早く秋が出発する港の所在する海岸に行きたいというのは自然であろう。しかし、詠み手の所在位置と想定される都から、陸路もしくは水路を通して海岸に行くのは、客観的には時間がかかることだと考えられる。

そこで注目したいのは、三句「とひわたる」が「飛び渡る」に当たる可能性である。三句が「飛び渡る」であるとすれば、詠み手が自身を鳥に喩えて、空路を通して海岸に迅速に赴くという惜秋の感情を強調する誇張表現として捉えられる。なお、上記の「誘ふ」の用例には、雁が秋風に誘われて飛来することを詠む例が見られ、特に『後撰和歌集』・三六〇「秋風にさそはれ渡るかりがねは物思ふ

人のやどをよかなん」にある「さそはれ渡る」という表現は、二番歌の二・三句における「海へ誘って飛び渡る」という情景と類似している。即ち、詠み手が鴛鴦の鳴き声による海岸への誘いを聞き、鳥のように飛んで行く、という奇抜な発想が二・三句に仕込まれているものと考えられる。そして、三句は「問ひわたる」も掛かっており、下の句の疑問句へと続いていくのであろう。

終わりに

以上のように、本稿は「陽成院歌合（惜秋意）」の二番歌の解釈を検討してきた。その結果として、二番歌の現代語訳は次のようになる。

「をし」と鳴いて、秋との別れが惜しいと思う鴛鴦よ、（同じく秋を惜しいと思う私を）海へも誘ってくれ。私は（至急、鳥のように）海を飛び渡り、そこでずっと尋ね続ける、「いずこが秋の過ぎ去る渡し場なのだろうか」と。（秋を探し出して留めるつもりだ）。

以上のように解釈すると、二番歌は、全体的に誇張的な表現で詠まれており、修辞技法においては、所々に比喻や擬人などの手法が施されたものと言える。「惜し」と「駕（をし）」、「問ひわたる」と「飛び渡る」、季節の移り変わりを意味する「渡り」と渡し場を指す「渡り」、という三つの掛詞が用いられ、濃縮した内容を作り上げたの

である。しかし、結果的には言葉足らずで、晦渋な歌となってしまう。ただ、二番歌が先行歌の表現を積極的に取り入れ、且つ斬新な発想を大胆に詠み込むこと自体は評価すべきであろう。

なお、本歌合の参加者に関して是不明だが、拙稿^{〔註1〕}の考察を通して、陽成院関係歌合に属する「陽成院親王二人歌合」では陽成院の両親王、「陽成院一宮姫君歌合」では元良親王の二人の娘が左右の頭を担当したことが判明したので、本歌合もまた陽成院の親族を中心に構成されている可能性が高いと考えられる。また、拙稿^{〔註1〕}で述べたように、本歌合には『古今和歌集』周辺の先行歌の撰取が見られ、習作的な一面が窺える。先行歌表現を積極的に取り入れながら斬新な発想を大胆に詠み込むといった二番歌の方針は、本歌合の習作的な性質と合致していると言えよう。また、二番歌の初句・末尾と類似する、

をしとおもふ心そふかきあまの川なかれて秋のとまりなるらむ
（一三）

が見られ、その歌の解釈について今後別稿にて論じたい。

〔付記〕

本稿において引用した和歌は、特に断らない場合は『新編国歌大観』古典ライブラリー版による。「陽成院歌合（惜秋意）」の本文は、国書データベースに収載されている肥前島原松平文庫本の画像を底本にし、適宜漢字を当て

て校訂したものである。各歌の歌番号は、便宜上、『新編国歌大観』の歌番号と一致させた。

本稿は令和四年広島大学国語国文学会研究会での口頭発表を整理したものである。席上ご教示頂いた方々にお礼を申し上げる。

〔注〕

- (1) 萩谷村『増補新訂 平安朝歌合大成 第一巻』(同朋舎出版 一九九五年)による。二〇四～二〇八頁。
- (2) 肥前島原松平文庫本による翻刻本文。
- (3) 国書データベースに収録されている肥前島原松平文庫本・宮内庁書陵部蔵本・島根大学図書館蔵本・弘前市立図書館蔵本では「とひわたる」、群書類従本では「飛わたる」とある。
- (4) 当該箇所「力士」は『新編国歌大観』・『新日本古典文学大系』『新編日本古典文学全集』では「りきじ」、『和歌文学大系』では「りきし」と表記されている。
- (5) 底本では「おし」と記されているが、同本において「惜し」を意味する語の表記には「おし」と「をし」の混用が見られる。「おし」と表記された歌の番号…1・2・4・5・6・7・8・10・11・12・16・18・21・23・27・31・32・34・35・36・37・38・39・43。「をし」と表記された歌の番号…3・13・20・25・30・33・45・46。このため、当該歌の「おし」についても「をし」と解釈することが可能だと考えられる。
- (6) 久保田淳ほか『和歌文学大系5 古今和歌集』(明治書院、二〇二二年。二〇一頁)。
- (7) 新藤協三ほか『和歌文学大系52 三十六歌仙集(二)』(明治書院、二〇二二年。八三頁)。
- (8) 石井文夫ほか『和歌文学注釈叢書2 大倉院御集全注釈』(新典社、

二〇〇六年)。九五～二〇一頁。

(9) 武内はる恵ほか『私家集全釈叢書12 相模集全釈』(風間書房、一九九一年)。五二八頁。

(10) 小島憲之ほか『新日本古典文学大系5 古今和歌集』(岩波書店、一九八九年)。

(11) 中野幸一『新編日本古典文学全集16 うつほ物語③』(小学館、一九九九年)。三九一頁。

(12) 真木宏造ほか『決定版 日本の野鳥650』(平凡社、二〇一四年)。

(13) 稲岡耕二『和歌文学大系4 萬葉集(四)』(明治書院、二〇一五年)。五七二～五八〇頁。

(14) 「陽成院親王二人歌合」の成立事情再考…名称に対する疑問を手がかりに、『古代中世文学論考 第四九集』(新典社、二〇二三年五月)。五一～七二頁。

『陽成院一宮姫君歌合の本質・陽成院関係の歌合及び返歌合として』、『表現技術研究』第一七号、二〇二三年三月。一～二二頁。

(15) 「陽成院歌合(借秋意)」における先行歌撰取、『表現技術研究』第一八号、二〇二三年三月。二七～四三頁。

一〇・うごう、広島大学大学院人間社会科学部研究科博士課程後期在学